カトリック愛苦会修道会の歴史的研究　Ⅰ　草創期

A Historical Study Ⅰ of the Order of Catholic AIKU-KAI －Outset－

中川憲次
Kenji Nakagawa

序

私はこれまでに、マイスター・エックハルトの説教との関係で、中世ヨーロッパで活躍したベギン会修道女に関する研究を進めてきた。そのベギン会修道女の在り方を髣髴とさせる修道会が日本にもあることに気付いたのは2006年のことであった。すなわち2006年９月、私は奉職している福岡女学院大学の「秋期キリスト教特別週間」の一日、社会福祉法人希望の丘．特別養護老人ホーム聖母園常務理事であられる萩原アサヱ先生のお話を聴かせていただいた。先生は、特別養護老人ホームにおける長い間の誠実なお働きについてお語りくださった。そのお話の中で、萩原先生がカトリック愛苦会修道会の修道女であられること、またその修道会が在俗の修道会であるということを知り、ベギン会との類似を直感した。今年になって、ご多忙な萩原先生にご無理をお願いして、頻繁にインタビューさせていただいた。以下では、萩原先生のお話を軸にして、ベギン会との比較を念頭に置きつつ、カトリック愛苦会修道会の歴史について叙述したい。

1　苗床

「カトリック愛苦会修道会」と称する修道会は、現在では日本の「福岡県三井郡大刀洗町大字今」以外には存在しない。そして、この修道会は町外れにではなく、大刀洗町の真ん中に堂々と存在している。そのような大刀洗町の様子を活写している文章があるので引用したい。佐藤早苗著『奇跡の村－隠れキリシタンの里・今村』の、まず第１章冒頭に曰く、

「福岡から西鉄甘木線に乗って大堰駅を出ると、田園風景の遥かかなたに意表をつくように、ヨーロッパ風の、二つの塔を持つ古城のような立派な建物が目に入る。今村カトリック教会である。そのあたりは『今』という名の小さな集落で、俗に『今村』と呼ばれている隠れキリシタン（切支丹）の里である。今村キリシタンは、他の隠れキリシタンたちとは、いささか違った道を選んで歩んできた。時代から取り残されたというのではなく、ある意味ではパラダイスのように、いまもその末裔が外界から侵されることなく、当時の人間関係のまま住みついているのである。[(1)]」

この書き出しからだけでも、大刀洗町大字今という土地の一種独特の雰囲気がよく伝わってくるであろう。しかし、次の文章はその土地の特徴をよりいっそうよく伝えている。曰く、

「隠れキリシタンの里・今村へは大堰駅から、筑後平野の田畑の中を貫く県道秦野－鳥栖線をしばらく行く。両側に集落がぽちぽち見え始めるあたり、その右手が『上高橋と下高橋』、左手が『今』村である。『今』村には百軒足らずのごく普通の民家が寄り合っており、その地方には不似合いなほど、立派で荘厳な今村カトリック教会が聳えている以外には、一見しただけでは他の集落となんら変わりはない。しかし一歩踏み込んでみるとその違いが次第に見えてくる。高橋にはバスも通っており、寺があって、寺が経営する保育園がある。そして魚屋、八百屋などはもちろんのこと、酒場もあれば電気屋、自転車屋、建設会社、不動産屋まである。ところが隣接した今村には見事に何もない。巨大な教会と、教会にかかわりのある修道会、乳児園、保育園、養護老人ホームなどだけだ。それに村人たちの生活を支える食料品雑貨ストアが一軒だけ。他にはたばこ屋もなければうどん屋の一軒もない。あとは閉ざされた平屋や二階家がぽつぽつとあるだけだ。しか

も玄関にかかっている表札は、どこに行っても平田姓と青木姓ばかり。全部回っても他の姓は四、五軒しか見当たらない。隣の高橋でも平田と青木が多いが、彼らは今村からの分家である。これはいかに村人たちの結束が強いか、そして親戚同士の結婚が多いかを物語っている。それにしても不思議に思うのは、身を隠したい彼らが、なぜ見通しのいい筑後平野の真ん中に集落を作ったのか。なぜ他の隠れキリシタンたちが潜んだように、僻地の山あいや小島や海岸ではなかったのか。その疑問がどうしても残る。(2)」

上記の引用のうち「巨大な教会と、教会にかかわりのある修道会、乳児園、保育園、養護老人ホームなどだけだ。それに村人たちの生活を支える食料品雑貨ストアが一軒だけ。他にはたばこ屋もなければうどん屋の一軒もない」という文章が、愛苦会修道会を育んだ土地としての「大刀洗町大字今」の特徴を最もよく表している。そしてそれはたとえば、今もベルギーのブルージュやリエージェに残っているベギン会の修道院跡の様子によく似ているのである。ベルギーのベギン会修道会は周りを外壁で囲まれた都市内都市とも言える佇まいであり、教会を中心にベギンの住む館、職場、そして病院等があるだけだったのである。

なお、「それにしても不思議に思うのは、身を隠したい彼らが、なぜ見通しのいい筑後平野の真ん中に集落を作ったのか。なぜ他の隠れキリシタンたちが潜んだように、僻地の山あいや小島や海岸ではなかったのか。その疑問がどうしても残る」という佐藤氏の疑問に対しては、大刀洗町昔物語編集委員会による『大刀洗町昔ものがたり』中の次の文章が答えになるであろう。その第十四章「今村の巻」(一)「今村カトリックの起源」冒頭に曰く、

「昭和の初めごろ、土地の古老は『今村カトリックは、島原の乱後、右京、左京兄弟が落ちてきて村に住みついたのが始まりである。その後、兄は弾圧に屈して改宗し、庄屋の役をつとめたが、弟はいかなる迫害にも動ぜず、断じて信仰をすてなかった』と語っていた。また、その他にも『今村の青木家の祖先は、徳川家の旗本、青木紀伊守一矩・青木民部少輔の兄弟であり、信仰を守るために島原に移り、島原の乱後今村に住みついた』とも、『都からの落人、あるいは、府中から移り住んだ』とも伝えていた。かりに、その落人説を受け入れるとしても、山間僻地ならともかく、平野の真ん中の縁もゆかりもない所に忽然と落人が逃れて来て住みついた、と考えることには無理がある。そこには落人を受け入れ、かくまう素地が既にできていたと見るべきである。事実、毛利秀包が久留米城主となった天正十五年から、田中吉政が筑後国を領していた慶長十八年の間には、今村にキリスト教信者が多数くいたことは、はっきりしている。しかし、その種子は、今少し遡ってまかれていたと思われる。(3)」

ここに言う、「落人を受け入れ、かくまう素地」として「今村にキリスト教信者が多数くいた」ことについては、先程疑問を呈していた佐藤氏自身も、結局次のように結論しておられる。曰く、

「大刀洗一帯にキリシタンの種が撒かれたことはすでに述べたが、『邪宗門一件口書帳』に記されている高橋大庄屋・後藤十郎左衛門の申上覚によると、信者の数は、今村＝五百人、上高橋＝百五十七人、小島村＝六十人、平田町＝九人、両本郷町＝百八人、高樋村＝四人、本郷枝村＝九人、菅野村＝四人、徳次村＝九人、友光村＝八人、合計八百六十八人となっている。この数字を見ても明らかなように、今村の五百人は圧倒的に多く、当時の村民の数からして、ほとんど村全体といっていい。ほとんど、という表現をしたのは、確実な転び、転宗者が一軒あったからである。というのは田中村が今村になった頃、右京、左京という兄弟がいて（落武者という説もある）、その二人はともに熱心なキリシタンであった。が、弟の左京は厳しいキリスト教弾圧のため断念して仏教に転向し、大庄屋に取り立ててもらった。裏取引があったという説もあるが、今村ではこの左京一族以外には転びはなく、村全体がキリシタンを護り続けたと考えられているのである。そしてそれにはキリシタンから転んで大庄屋になった左京が陰ながら力になっていた。つまり左京は自分が魂を売って大庄屋になり、たてまえではキリシタンを取り締まりながら、裏では大目に見てキリシタンを保護していたということである。(4)」

ここまで述べ来った点について、学問的に信頼の置ける海老沢有道氏の証言を最後に引いておきたい。海老沢氏は『キリシタン研究　第十八輯』に「筑後国御原郡今村の復活切支丹」と題した論文を発表しておられる。この書物が発行されたのが1978年であるので資

料的に新しいとは言えないが、次に引用する冒頭の一文を見ただけでも、今なお信頼するに足るものであることは明らかである。件の論文の冒頭で、海老沢氏曰く、

「浦上を中心とする幕末維新当時の切支丹復活と露見、そして迫害配流は、いわゆる浦上四番崩れとして、多くの人々の知るところであるが、豊国御原郡今村、現在の福岡県三井郡太刀洗町大字今を中心とする復活切支丹については、余り研究も進んでおらず、従ってまた広く知られてもいない。しかし、早く戸田乾吉氏によって言及され、マルナス氏また浦上信徒からの聞取りによって言及、それにもとづきつつ浦川氏はさらに聞き取りを加えて、詳しく今村の復活事情を明らかにし、ラウレス師また筑前筑後地方のキリシタン布教史を加えて、それらによる紹介をされている。が、遺憾ながら当時、拠るべき日本史料が知られていなかったため、実証性に欠ける憾みがあった。一九五二年刊の『今村切支丹小史』及び一九六四年刊の『今村教会百年のあゆみ』の編者はともに記されていないが、同地古老聞取りを加えて、小冊子ながら新知見も与えられるが、本筋としては浦川・ラウレス両師の研究に依拠している。同じ一九六四年、竹村覚氏は現地を調査し今村復活切支丹の明治元年調書『邪宗門一件口書帳』を見出し、またその他の関係文書を入手して紹介されたものの、伝承に若干の批判を加えたにとどまり、一件史料による具体的研究にまでは至らなかった。漸く一九七三年に小郡市在住の国武喆夫氏が「邪宗門一件口書帳雑考」(『久留米郷土研究会誌』二)を、ついで今村在住の平田松雄・竹崎貞夫両氏と協力して、一九七七年三月に『口書帳』全文の校訂を同研究会誌六号別冊として公表された。かねてこの一件に関心を抱いていた私は、その前年、国武氏のお世話により『口書帳』を初めて拝見することが出来たが、それが縁で翌年七月、現地に史料採訪を行ない、同氏はじめ、今村カトリック教会の糸永一(ひとし)神父、前記平田・竹崎両氏、久留米市文化財専門委員古賀幸雄氏、久留米市立図書館、その他多くの方々の御好意に与かり、種々の史料に接し、多くの知見を与えられた。これらの方々に対し厚く感謝しつつ、今村切支丹について史料に即して御紹介したいと思う。[(5)]」

それでは、海老沢氏は今村のキリスト者の数についてどのように書いているであろうか。件の論文の第3章において海老沢氏曰く、

「特に今村は、慶応三年一月の浦上の徳三郎らの報告によると、戸数は百戸ばかり、附近の村落にも百戸ばかりの切支丹が潜んでいるというが、『明治二十二年(一八七九)町村合併調書』によると、太刀洗村の今村は『人口七六四、戸数一二九』とある。前者の報告は必ずしも正確な数値でないことは当然であるが、これによっても今村住民の大部分がキリシタンであったことだけは確かである。後者の調書が作成されたころの今村は、明治十二年(一八七九)以来のコール、ソーレ師らにより、集団的にカトリックとなり、明治十四年(一八八一)八月に聖堂建立。五年後には信徒数一五三〇名と註せられ、忽ち聖堂が狭隘を告げたので、翌二十年十一月増築されたという。この聖堂区には当然周辺町村を含んでいるから、今村のみの数値ではないが、明治二十二年の七八三名という今村人口の大部分がカトリックであり、信徒の自然増加率から逆推して、明治元年の五〇〇名という数値も、決して過大ではなく、全村ほとんどが『かくれ』であったと見てよい。それに上高橋・小島・両本郷を加え、この四ヵ村に、実に八二五名という多数の『かくれ』が存続して来たことは驚異に値する。[(6)]」

こうして、昔からほとんど村全体がキリスト者であったことが、今村のキリシタンが「見通しのいい筑後平野の真ん中に集落を作」り得た理由だと言えるであろう。

2　宣教師

カトリック大阪大司教出版による機関誌『声』の1993年10月号はシリーズ「福音と宣教」として「カトリック愛苦会修道会」を取り上げている。そこに「愛苦会修道会の創立」と題して曰く、

「愛苦会修道会は、一八八四年三月一七日当時今村カトリック教会主任司祭パリーミッション会のソーレ師のご尽力により、長崎の浦上十字会(現お告げのマリア修道会)より派遣された、岩永キク姉と今村カトリック教会の平田ロク外五名の熱心な乙女たちによって創立された。[(7)]」

ここに登場する「ソーレ師」については、日本基督

教団出版局刊の『キリスト教人名辞典』にも載っていない。むしろ、ソーレ師の前に今村カトリック教会に主任司祭として赴任したコール師について載っている。しかし、それも簡単な記述であるので、ここでは比較的詳しい『新カトリック大事典』から引きたい。曰く、

「コール Corre, Jean-Marie（1850.6.28－1911.2.9）パリ外国宣教会司祭。フランス・ブルターニュ地方のプルーガステル生まれ。1874年司祭に叙階されてから、1875年パリ外国宣教会入会。1876年（明治９）に日本南緯代牧区に派遣され、長崎で日本語習得。最初の宣教活動は天草地区、今村地区の旧信者への布教であった。[(8)]」

以下、コール神父とソーレ（もしくはソウレ）神父について触れられている幾つかの文献から引用したい。まず、『大刀洗町史』に曰く、

「明治十二年十月コール神父が、初代の主任司祭として公式に今村を訪問した。そして村人に洗礼をさずけ、四方に散っている信者も集めて、宗教教育を行い、今日の今村カトリックの基礎が築かれた。コール神父の次にソウレ神父、この神父の時、明治十四年（一八八一）はじめて教会が建設され、明治二十年には更に教会が拡張された。[(9)]」

次に、フランシスク・マルナス著『キリスト教復活史』に曰く、

「筑後では、ソーレが一八八〇（明治二二）年に今村に定住した。この国には約一、〇〇〇人のキリスト教徒がいたが、宣教師はそれまで毎年、年に一ヶ月以上そこに滞在するだけだった。ソーレが今村に住みついた時にだした次の手紙によって、我々はこの教徒団の発足を知ることができるだけでなく、日本のこのような地での宣教師の伝道と喜びとを賭けた生活がどんなものかを知ることができる。『（略）私が今村にきてから、すなわち今月五日以来、私たち、Ｐ・コールと私は約一〇〇人に洗礼を授け、約三〇〇の告解を聞きました。私は毎日四〇人の告解を聞くことになっています。クリスマス前の一週間には私は朝から晩まで忙しいことでしょう。これに、純真な信者のための公教要理、聖職の数多くの他の仕事が加わります。私には退屈する時間がないことがよく分るでしょう。[(10)]』」

最後に佐藤氏の前掲書に曰く、

「カトリック教の神父が今村に初めて姿を現したのは明治十二年（一八七九）十月頃であった。ジャン・マリー・コール神父で、教区司祭として叙階されて一年後、外国宣教を熱望してパリ外国宣教会に入り、七六年十二月三十日、新年を迎える直前に長崎に上陸したという経歴の持ち主である。日本語を勉強の後、最初に与えられた仕事が今村と天草のキリシタン集落を回って、秘蹟を授け、状況を報告することであった。コール神父は今村に入る前の一月今村から長崎大浦天主堂に行った青木佐六、青木房吉、井手善次郎の三名の洗礼をし、さらに四月一名、五月に六名、七月に三名、十月に五名に洗礼を授けている。その直後、十月のうちにコール神父は今村入りしたが、そのときは洗礼を授けた顔見知りもいたことになる。隠れキリシタンの村・今村に、教会などあるはずもなく、平田弥吉が教理指導で使っていた青木才八家の土蔵で、神父のミサも行われた。その年の十二月に六十四名、翌年の三月末までに三百七十名、四月に百五十名、十一月に百十二名が、その土蔵で洗礼を受けたのである。このようにして一年間、コール神父は不自由な環境のなかで、旧信者発見と信仰的教育、そして集団洗礼へ導くという大仕事を果たしたのである。『今村カトリック教会歴代主任司祭』に、第一代司祭としてコール師の名前と写真が掲載されている。明治十二年（一八七九）今村キリシタン復活と今村カトリック教会の誕生は青木家の土蔵から始まったのであった。コール神父の後を継いだ二代目神父はソーレ神父で、この神父は明治十三年から八年三カ月（1880－1889）今村に定住し、信徒の司牧に当たった。その年には一年間で九百六十五人が洗礼を受け、まだ約五百人が受洗準備中であった。これは大変な数字で、今村だけでカトリック人口の自然増加を越えるものであった。ソーレ神父が今村定住中、故国の両親に書き送った手紙の中に、こんな文面があった。『ここの信者集団の精神はすばらしい。私が初めてここに来て感心したのは、信者全員が使徒のようだということです。誰かが洗礼を受けると、その人はたくさんの人を家に集めて次の人の洗礼の準備をさせるのです』という驚きの内容である。（略）新しくカトリック教徒に生まれ変わった今村では、正式に洗礼を受けた信徒の数は年々確実に増加した。一八八六年（明治十九）に千五百三十人。一八九四年（明治二十七）に千七百人。一八九九年（明治三十二）に千

八百九十一人。一九二一年（大正元）に二千七十人。教徒の数が増えると、教徒が集まる教会もそれなりの広さが必要になってくる。コール神父を迎えてミサを行なった青木才八家の「土蔵」……これを教会と呼ばなければ、今村に初めて造られた教会は明治十四年（一八八一）、間口六間、奥行き十間、藁屋根の木造建てであった。粗末ではあったけれど、敷地として選んだところは由緒ある場所で、今村キリシタンが敬慕するはりつけ刑にされたあのジョアン又右衛門の墓所である。当時そのあたり一帯はまだ鬱蒼とした竹薮であったが、神父も村人たちも一体となって開墾し整地した。そしてジョアンの墓の上に祭壇を重ねて教会を造りあげたのである。教会が出来上がったときの神父と村人たちの喜びは大変なもので、藁屋根もまるで黄金の教会のように見えた。当時の神父は二代目ソーレ神父だが、初代コール神父と同じく、まるで開拓民のような暮らしだった。宿舎もなく、貧しい農民の家にともに住み、田畑を耕し、農民食を食べ、今村人になりきっての伝道であつた。特にソーレ神父は九年近くもこのような今村で暮らしている。今村の人たちが次々と洗礼を受け、後を絶たなかったというのも、このような神父と村人たちの血の通った深い結びつきがあってのことと思われる。明治十四年に建てたこの教会は、信者の増加のため、またたく間に狭くなってしまった。そこで六年後の明治二十年（一八八七）十一月、ソーレ神父はさらに教会の増築に踏み切ったのであった。明治二十二年（一八八九）二月、ソーレ神父は今村から久留米に移り、今村には新しく高木源太郎神父が就任した。[(11)]」

以上の引用の中で、愛苦会修道会の創設に重要な役割を果たしたのはソーレ（ソウレ）神父である。上述の『声』誌に愛苦会修道会の創設にあたり「パリーミッション会のソーレ師のご尽力により」とあった通りである。なお、そこには「長崎の浦上十字会（現お告げのマリア修道会）より派遣された、岩永キク姉と今村カトリック教会の平田ロク外五名の熱心な乙女たちによって創立された」ともあった。愛苦会修道会の創設には長崎の浦上十字会も大きく貢献しているのである。岩永キクを今村に派遣した浦上十字会こそ愛苦会修道会の母体であると言わねばならない。

3　母体

ここでは、カトリック愛苦会修道会の母体とも言える長崎の「浦上十字会」について略述したい。「十字会」は後に「お告げのマリア修道会」と改名されたので、『新カトリック大事典』の「お告げのマリア修道会」の項から引く。曰く、

「お告げのマリア修道会〔英〕Sisters of the Annunciation of Our Lady、〔略号〕S.A.D・邦人女子修道会。1975年（昭和50）に正式に設立された。明治の初期、250年に及ぶキリスト教弾圧政策に終止符が打たれると、厳しい圧迫に耐えて信仰を生き抜いた人々のなかから、苦しむ同胞のために生涯を献げ、キリストとともに生きる道を選ぶ女性たちが出た。1874年（明治７）、長崎地方に赤痢・天然痘が流行した折、パリ外国宣教会の宣教師たちの救援活動に協力した岩永マキら４名の女性たちが、孤児となった女児を育てるため共同生活を始めた。この共同体を母体として、1977年、宣教師たちの指導のもとに準修道会『十字会』が発足したのをはじめ、長崎の各地で宣教師たちの活動に協力する女性たちの共同体が創立され、1927年、長崎が邦人司教区になった後も地域の必要に応じて創立が続けられた。会員たちは信仰教育、典礼奉仕、孤児養育、病人や老人の世話に携わったが、その生活を支えるために開墾から始まり農業、牧畜、養蚕、機織り、行商などに従事した。それらの共同体のほとんどは『愛苦会』と称し、それぞれが独立した準修道会であった。1956年、当時の長崎教区長山口愛次郎によって教区内にあった26の共同体が統合され、在俗修道会『聖婢姉妹会』となり、一つの家族として歩み始めた。1975年、最初の共同体が生まれてから100年の後、教皇庁布教聖省（現在の福音宣教省）の認可のもとに『お告げのマリア修道会』として設立された。会員は『私は主のはしためです。お言葉の通りになりますように』（ルカ１：38）との言葉をもって救いの業に全面的に協力したマリアを理想として、その助けを願いつつ、その宗教教育、福祉事業、医療、教会奉仕に携わっている。[(12)]」

ここに既にして「愛苦会」の名が出ているのである。そして、それが統一されて「聖婢姉妹会」と命名され

た折に「在俗修道会」と認識されていたこともベギンとの比較において注目に値する。ベギンもまた「在俗修道会」であり、「準修道会」という扱いを受けていたのである。この特徴が現在のカトリック愛苦会修道会にそっくり受け継がれているのである。

ところで、「十字会」については、小著ながら片岡弥吉著『ある明治の福祉像――ド・ロ神父の生涯』に詳しいので、以下に引用したい。なおこの書物の存在を私に知らしめてくれたのは国立音楽大学名誉教授であられる小林恵子氏の「カトリックの果した先駆的な児童福祉施設－長崎の『浦上十字会』とド・ロ神父を中心に－（その２）」という論文である。小林氏はほとんど「浦上養育院」との関係で「十字会」を取り上げ、片岡氏の前掲書に依りつつ筆を進めておられる。小林氏の「十字会」を見る角度は、私の「カトリック愛苦会修道会」研究に対して示唆深い。「岩永マキたち（「浦上十字会」）と孤児の養育」と題された第４章第２節で、小林氏は次のように記しておられる。

「岩永マキら四人の娘は信者の高木仙右衛門の納屋に合宿し、病人の看護に当ったが、このとき両親を天然痘で亡くした幼い孤児をかかえ養育するという使命にたたされることになった。親を失った幼な子がいる、生きるてだてをもたぬ未亡人がいる、どうかして手をさしのべたいという岩永マキ等の愛の業が幼い子の養護施設を誕生させた。こうして娘たちの生活している納屋を最初の養護施設として発足した。これは明治維新以後、邦人の手による最初のものである。この共同体は『女部屋』と言われたが明治10年には修道会として組織され『浦上十字会』と命名した（昭和50年「お告げのマリア会」と改称)。岩永マキは大正９年（72歳）に亡くなるまで約50年間、数千人の孤児の養育と働く修道女の育成に勤めた。[13]」

続いて「援助者となったド・ロ神父」と題された第３節に曰く、

「岩永マキたちを指導し、医療や孤児の養育、修道会の設立を援助したのがド・ロ神父である。彼は長崎地方にあって日本の近代化と社会福祉事業に多大の足跡を残した。日本に初めて石版印刷術を導入、医療、建築、農業、授産所の発展に寄与し、今日でも『ド・ロさま薬』『ド・ロさまソーメン』などの名がこの地方の人々に伝えられている。[14]」

そして、「『浦上十字会』の施設を模範として」と題された第５節はほとんど片岡氏の件の書物から引用されているので、片岡氏の書物から引用したい。ただ同書には岩永マキに関する「慈善婆さん」と題された強烈な文章があるのでそれを先に引用したい。曰く、

「明治大正のころ長崎の有力地方紙であった『東洋日の出新聞』は明治四三年二月、浦上十字会に“慈善婆さん”こと岩永マキを訪ねて八回にわたり取材記事を掲載しているので摘記する。…『記者の入り来るをみるやその中の一老婆が立って迎え座敷に招じた』『件の老婆が、茶よ、火鉢よ、と記者を歓待するが、主婦らしき者の出て来る様子がないので、今日は岩永の婆さんは留守ですか、と聞くと、“ハイ、私が岩永マキです”と答える。これはこれはと改めて挨拶するに、その身なりはと見ると、年齢は今年六十二歳といふが髪も黒く顔も福相に肥っていてどうしても年よりも十は若い。…』…『…一室に入れば小さき寝台六脚を三脚づつ枕合せにならべ、六名の嬰児スヤスヤと眠り居り、何れも枕元に一個ずつの哺乳器を備えあり。…布団を充分に着せし上、なお風を厭いしや頭部を肩あてようの物にて被ひたる。実に用意周到、霜さゆる街頭に捨てられし不幸の児もこの温かき恵みの霜に生育し立てらるかと思へば、婆さんの徳ますます感心せずにはおられない。…半日の清談にこんな快感を覚えたことは実に初めてであった。[15]』」

私はこの度、カトリック愛苦会修道会の萩原アサヱ修道女のお話を数回にわたってお聴きする機会を与えられたが、正にこの記者と同じく「半日の清談にこんな快感を覚えたことは実に初めてであった」という経験をしたのであった。

では本題に戻って、「『女部屋』の誕生」と題された第５章３節で片岡氏曰く、

「私心をまじえぬ純一な愛の火は類を呼び、炎のごとく燃えひろがった。“親を失った幼な子がいる”“生きるてだてをもたぬ未亡人がいる”、どうかして手を差しのべたいと願う若い娘たちによって、いわば自然発生的に愛の事業がつぎつぎにおこったのである。そうして次々に誕生した修道共同体が、長崎県各地で戦前まで“女部屋”と俗称されていた修道院である。だが、共同体としての組織をつくるにはやはり、経験と知織がいる。その生きた模範になったのが、マキたちの浦

上十字会であった。明治六年、キリシタン禁制の高札が全国から取り除かれたあと各地のキリシタンたちの間に愛の事業が行われ始める。佐世保の黒島からおトラさん、平戸の田助浦からおタケさん、外海の出津からおシゲさん、五島の奈麻内からおフミさんらが十字会に来て修練し、帰郷して新しい修道共同体をつくった。また十字会から出かけて行って、共同体の形成に協力したところもある。片岡ワイは黒島に、片岡スイは五島の鯛の浦に、浦岡サクが五島奥浦村堂崎に、野口フクが五島仲知に、岩永キクが福岡県今村に平山タカが同じく久留米に出かけて行って志を同じくする乙女たちと共に働いた。[16]」、

ここに「十字会から出かけて行って、共同体の形成に協力したところもある」として「岩永キクが福岡県今村に」と明記されている。あの「慈善婆さん」岩永マキと同志であった岩永キクが今村に送られ、「志を同じくする乙女たちと共に働いた」のである。岩永キクは『声』誌にあった通り「平田ロク外五名の熱心な乙女たち」と活動したのである。よって、「帰郷して新しい修道共同体をつく」るために「佐世保の黒島からおトラさん、平戸の田助浦からおタケさん、外海の出津からおシゲさん、五島の奈麻内からおフミさんらが来て修練し」ていた十字会が、「カトリック愛苦会修道会」の母体であることは疑いない。次は、「カトリック愛苦会修道会」の組織等の研究に進みたい。

註

1　佐藤早苗著『奇跡の村－隠れキリシタンの里・今村：』、８頁。
2　同書、10頁－11頁。
3　大刀洗町昔物語編集委員会『大刀洗町昔ものがたり』、大刀洗町、1997年、253頁。
4　佐藤前掲書、13頁－14頁。
5　キリシタン文化研究会編『キリシタン研究　第十八輯』吉川弘文館、1978年、379頁－380頁。
6　同書、385頁。
7　カトリック大阪大司教出版認可『声』1993年10月号、聲社、45頁。
8　上智学院新カトリック大事典編纂『新カトリック大事典Ⅱ』、研究社、2002年、953頁。
9　大刀洗町郷土誌編纂委員会編『大刀洗町史』、大刀洗町、1981年、168頁－169頁。
10　フランシスク・マルナス著、久野桂一郎訳『キリスト教復活史』、みすず書房、529頁－530頁。
11　佐藤前掲書、20頁－24頁。
12　『新カトリック大事典Ⅰ』、939頁－940頁。
13　『日本保育学会 第51回大会　研究論文集』1998年５月23日－24日、於　東京学芸大学、336頁－337頁。
14　同上、336頁－337頁。
15　片岡弥吉著『ある明治の福祉像――ド・ロ神父の生涯』、日本放送協会、1996年第３刷、82頁－84頁。
16　同書、86頁－87頁。